

池田草庵先生について

江戸時代末期（1813年7月23日）に宿南の農家の三男として生まれた。10才で母、12才で父を亡くし、広谷の満福寺に預けられ、僧侶としての修行を積むことになった。読み書きに励み、記憶力もあり几帳面な性格で満福寺の跡継ぎになってほしいと思われるようになった。しかし、17才で京都の儒学者「相馬九方」の指導を受け、儒学を目指す決心をし、不慮上人の許しを得ないで、寺を出て京都に行った。（草庵先生は、この行動を深く反省し、満福寺出奔図を一生自分の部屋に飾って自分の戒めとした。）京都では、儒学の他、朱子学、陽明学の哲学の勉強を行った。

草庵は31歳の時、但馬でぜひ教育してほしいと願う人が多くなり但馬に帰ることになった。そして、八鹿の「立誠舎」で塾を開き弟子の教育にあたった。35歳で生まれ故郷である宿南に青谿書院を建て、66歳で亡くなるまで、673人に教育を行った。門下生達は、互いに学び合い力をつけた。「青谿書院」のトイレの木戸には、門下生の残したローソクの炎のあとが多くある。この跡から、塾生がもっともっと学びたかったという気持ちが分かる。

門下生の中には、日本の優れたリーダーとなった人が多くいた。



池田草庵先生



青谿書院

池田草庵先生の教え 「肄業余稿より」（いぎょうよこう）

- 「**慎独**」
（自分が一人にいるときでも心を正しくもち、行いを慎むことを重んじる）
- 「**志は高遠を期し、功は切近を貴ぶ**」
（理想は高く持ち、学問は身近に役立つことを重んじる）
- 「**学ぶ者は、事を厭い、労を辞すべからず**」
（学問をするものは、日常の営みや肉体の労働をいやがってはならない）

草庵先生の教えは、万世に通じるものがある。